

ルカによる福音書6章46-49節 「堅固な土台」

1A 「主よ」という呼び名 46

1B 服従

2B 言葉だけ

2A 岩の上に建てる家 47-49

1B 聞いて、行う者 47

2B 二つの家 48-49

1C 地面を掘り下げ建てる者

2C 土台なしで建てる者

本文

ルカによる福音書を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、6章まで来ています。今朝は、先週午後礼拝で網羅しなかった最後の数節、46-49節までを見ていきたいと思います。「**46 なぜあなたがたは、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。47 わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行う人がみな、どんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。48 その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せても、しっかり建てられていたので、びくともしませんでした。49 しかし、聞いても行わない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家はすぐに倒れてしまい、その壊れ方はひどいものでした。』**」

イエス様は、貧しい者は幸いです、という言葉から始めて、マタイの福音書にある山上の説教と似た説教を、平地にて行われました。そこでの大きな内容は、「愛しなさい、敵をさえ愛しなさい」というものでした。そして、「あなたがたも訓練を受けるならば、師匠のようになれます」ということで、私たちがイエス様に倣って、自分を訓練することが書かれていました。キリストの弟子として何を訓練するのか？自己吟味です。人に対して、あれこれ言っている時に、実は自分には同じ問題が、大きく立ちはだかっているのだよということを、兄弟の目にある塵と、自分の目にある梁と比べて語られました。

そして、実は木によって決まることを語られました。良い木であれば、そこから出て来る実も良いし、悪い木であれば、悪い実が結ばれるとしました。つまり、自分自身がイエス様につながっているかどうか？ということです。良い木とはイエス様のことです。イエス様につながっているからこそ、良い実を結ぶのであり、どんなに自分が良い行いをしようと思ったところで、自分自身のものからでは悪い実が結ばれてしまうということです。

1A 「主よ」という呼び名 46

そしてイエス様は、最後に聞いている弟子たちに呼びかけをなさっています。「46 **なぜあなたがたは、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。**」福音書の中で、私たちは、例えばペテロが、「先生」と初めは呼びかけていたのに、あの大漁の奇蹟を目の当たりにした時に、「5:8 **主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。**」と言ったことを思い出してください。そこで、ペテロは初めて、イエス様がどのような方かを悟りました。それまでは尊敬すべき教師でしかなかったのですが、ここで自分の罪深さを圧倒的に知り、この方こそが自分の生活や人生を支配する主ご自身であると知ったのです。

それで、パウロは、イエスが主であると言い表すことができた時に、その人は救われるとしました。「ロマ 10:9-10 **なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせた**と信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」パウロは信じる、という言葉を繰り返していますね。このことと、イエス様を主とするということは、大きく関わって来ます。信じるという言葉よりも、信頼するとか、明け渡すという言葉に言い直すと良いでしょう。基本、私たちは自分自身を信じています。自分の持っている知識、経験、他の人から言い伝えられてきたもの、また周りの空気など、自分自身を信じています。けれども、イエス様が主であると言い表すことによって、自分の知覚や感覚ではなく、この方の言われることはすべてその通りだと認めて、意志も知性も、また感情もイエス様にお任せするのです。このような全幅の信頼を寄せることが、「イエスは主」という告白に含まれます。

「私は、自分がイエス様に従いとおせるか分からない」と言って、思い煩ってしまう人が多いのですが、そういった「分からない」ということも、任せてしまうのです。その心配もイエス様に丸投げしてしまうことによって、確かにイエスは主であると告白できます。

1B 服従

ところが、イエスを主として生きている弟子たちでさえ、それを口で言い表しながら、行動ではそれを物語っていないことがあります。主であるのに、主としていないことがあります。

ところで、前回の学びでは、敵を愛しなさいというイエス様の命令がありました。これは、人間には到底できない命令であることを話しました。事実、イエス様は、人間の愛は見返りを求めるのであって、愛してもらった人を愛したところで、どんな恵みがあるのですかと尋ねておられます。そこでイエス様が語られていたのは、私たちにできないことをしなさいということではないのです。「あなたがたの神はあなたの父なのですよ」ということなのです。「6:36 **あなたがたの父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くならない**。」父とはどのような存在でしょうか？威厳があり、養い、守り、そして何よりも子を愛してやまない存在です。そして、自分のものを子に受け継がせようとしています。そこで子は、父の言うことを聞き従います。自分には理解できなくとも、父が言っている

ことだからという理由だけで、聞き従います。これを一言でいうと「従順」です。

では、「主」とは何を意味しているのでしょうか？そうです、「服従」です。イエスが主であるならば、この方の言われることに自分が反発を感じても、いいえ、あなたが言われることですから、従いますとすることです。自分の権利や力を、この方のゆえに自ら放棄することです。ですから、イエス様が、「さばいてはいけません、さばかれないためです」と言われたのはそのためで、自分で相手を裁いて、不義に定めることは、私たちのする領域ではありません。イエスが主なのですから、イエスが裁き主であられ、裁かれることです。どんなに自分の知性や感覚では、理不尽に見えるようなことも、この方が指揮をしておられることを信じて、信頼して、それで判断を主に任せるのです。

したがって、キリスト者は服従するという生活が特徴となっています。主にあって、妻が夫に従う。主にあって、若者が長老に従う。主にあって、子が親に従います。また、主にあって上の権威、国の指導者や行政の長の言っていることに従います。

2B 言葉だけ

けれども、私たちはイエス様を主として生きていながらも、自分の拘りから素直に従えていない時があります。イエス様を主と告白したペテロのことを思い出してください。ペテロが、ヤツファ(ヨツパ)の皮なめし職人シモンのところに行った時です。彼が祈りのためにお屋に家の屋上に上がったのですが、空腹になって、人々が食事を用意しているうちに、夢心地になりました。「使 10:11 すると天が開け、大きな敷布のような入れ物が四隅をつりされて地上に降りて来るのが見えた。」とあります。そして、こうあります。「10:12-14 その中には、あらゆる四つ足の動物、地を這うもの、空の鳥がいた。そして彼に、「ペテロよ、立ち上がり、屠って食べなさい」という声が聞こえた。しかし、ペテロは言った。「主よ、そんなことはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。」ペテロは、まるで矛盾したことを言いました。「主よ、そんなことはできません。」主よ、と呼びながら、それはできません、とは言ったらイエス様は主ではないのです。

ここで大事なのは、ペテロが出来ないと言ったのは、能力がないからできないと言ったのではないことです。拘りがあるからできないと言ったのです。主は、「10:15 神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない。」と言われました。ペテロが、清くないと言い張ったのです。イエスを主とすることは、自分がしていることに付け加えて、これこれを行いなさいと命じられるのではなく、むしろ、イエスを主とするために、これまで自分が誇りに思っていたことも、主のゆえに手放すことを意味します。ですから、いろいろな規則を行って自分を太らせるのではなく、むしろ、それらの規則を捨てて、主の命じられていることだけを聞いて行くということでもあります。

2A 岩の上に建てる家 47-49

そこでイエス様は、ご自身を主とするために喩えを語られます。

1B 聞いて、行う者 47

47 わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行う人がみな、どんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。

一見、イエス様のこの言葉を聞くと、「行っていない」ということに目が留まりがちです。自分はイエス様の言われていることを知っているのに、それを行っていないという問題に焦点を当てます。それで、いかに行くことができるようになるのかを焦点に当ててしまうのです。世の中には、そういった自己啓発的な本で溢れています。つい一昨日も、電車広告で、「実はカンタン「怒らない技術」10のコツ」なんていう本が宣伝されているのを見ました。そしてグーグルで検索したら面白いことに、「怒らない人から学ぶイライラしない 7 つの方法」「怒りを抑える方法:5 つの怒らないコツ」「怒らないコツ「ゆるせない」が消える 95 のことば」・・・回数や数字がどんどん変わりますね！とても興味深いです。

けれども、聖書は私たちの行い、あるいは行為によって自分の恥じている部分を覆うことはできないことを教えています。アダムが罪を犯した後に、エバとアダムの二人は自分たちが裸であるのに気づきました。「創 3:7 そこで彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちのために腰の覆いを作った。」自分で恥を隠そうとしたのですが、主が近づいて来られたら、その御顔を避けて、園の木の間で身を隠しました。ですから、行いによって自分の負い目を補うことはできないのです。

2B 二つの家 48-49

1C 地面を掘り下げ建てる者

イエス様は、「わたしのことばを聞き、それを行う人」を、家の喩えで説明されます。

48 その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せても、しっかり建てられていたので、びくともしませんでした。

イエス様がここ 48 節、そして次の 49 節で繰り返しておられる言葉は、「土台」です。何を行うか？という建物よりも、それらの行いを支える土台に注目させています。建物はいくらでも大きく、見栄えもよくすることができます。けれども、土台が堅固なものに支えられてこそ、洪水が押し寄せても倒れることはありません。

そこで、私たちが吟味しなければならないのは、自分が何を土台にしているのかを確かめることです。自分が行っていることは、いつもと変わらないかもしれません。毎日の生活、また信仰生活や教会生活もいつもとは変わらないかもしれない。ところが、いつの間にか何かを行なっているだけのことになっているかもしれません。自分の行っていることで、自分は家を建てていると思っています。ある人は、居場所を求めているだけかのもかもしれません。それが見つからなければ、自分

がぐらついてしまいます。感情が土台にはならないのですね。または、何か特定の神学や聖書の解釈が土台になっているかもしれません。知識はとても大切です、けれども、全ての人が神学や聖書の理解が100%一つになるなど、あり得ません。

私たちは、いろいろな洪水を通りますね。人生の嵐が襲い掛かります。落胆を経験します、失敗を経験します。悲しみも経験し、悲劇も襲います。また誰かが死ぬということもあるでしょう。そういった洪水の時に、自分が以上のようなところに土台を据えていたら、たちまち倒れてしまいあつす。

ここで、イエス様は「**岩の上に土台を据えて**」と言われます。岩は堅固です。揺らぐことはありません。この岩とは、キリストご自身のことです。聖書には、主なる神が岩であることが数多く書かれています。「Ⅱサム 22:2-3【主】よ、わが巖、わが砦、わが救い主よ、身を避ける、わが岩なる神よ。わが盾、わが救いの角、わがやぐら、わが逃れ場、わが救い主、あなたは私を暴虐から救われます。」主こそが岩であります。そしてペテロに対して、「わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。」と言われました(マタ 16:18)。この岩とは、イエスが、生ける神の御子キリストだという告白です。

ですから、話は最初に戻るのです。私たちの土台はあくまでも、イエス・キリストとの関係なのです。しかも、すべてをこの方に明け渡しているという、イエスを主としている関係です。居場所でもなければ、神学のような知識でもない、また何らかの行為でもない、イエスを主としている関係なのです。しかも、イエスを「主」とは口で人々は言うでしょう。しかし、それはただ口で唱えているだけで、実際は他のものを土台に据えていることが多々あります。そこでイエス様は、主よ、主よ、と呼ぶだけでは意味がないことを語られているのです。

「**地面を深く掘り下げ**」という言葉がありますね、ここも大事です。深く掘り下げることによって、ようやく岩にたどり着きます。柱を立てるのに掘り下げはするけれども、岩にまで到達していないことがあるのではないのでしょうか？つまり、イエス様を主とする深い関係にまで到達していないのです。この方についてのことは、たくさん聞かかもしれません。この方の名で祈るかもしれません。けれども、日々の祈りの生活で、自分がしたいことがあったり、自分の考えていることがあっても、主が語られたという理由だけで、「はい、分かりました。」と静まって、頷く時を持っているか？どうかであります。そんな時、ペテロのように「主よ、そんなことはできません。」と反発してしまうかもしれません。それでも、主が言われているのですから、お言葉ですから、ということで、その言われた通り行なうという関係です。そうした、普段は目に見えない部分、イエス様と親しく関わっている部分が、ここでいう地面を深く掘り下げて、岩の上に土台を据えるということでもあります。

私たちが今、教会で標語にしている言葉にも、土台について書いてあります。ここではキリストは岩ではありませんが、「要石」として登場しておられます。「エペ 2:20-21 使徒たちや預言者たち

という土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。このキリストにあって、建物の全体が組み合わされて成長し、主にある聖なる宮となります。」教会としても、いろいろな試練が来たとしても、この方を要の石、あるいは岩としている、ぶれずに、揺るがずにいることができます。

2C 土台なしで建てる者

49 しかし、聞いても行わない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家はすぐに倒れてしまい、その壊れ方はひどいものでした。」

ここまで読んでお分かりになったでしょうか？ここで言っている、「聞いても行わない人」というのは、イエス様を主とする関係ではないところで、自分の家を建てていることです。「聞いて、行う」というのは、「聞いた上で、それから行いなさい」という意味ではありません。そうではなく、「従うつもりで、聞く」ということです。イエス様を信頼しているから、この方が言われることには間違いないと信じているから、だから従うのです。行わないことが問題ではなく、本当の意味で聞いていないのです。イエス様に信頼して、聞いていないからです。何か自分の持っているものを優先させています。そして、取捨選択して聞いているかもしれません。何か自分に拘りがあり、それを捨てられていません。そういった時にいろいろなことを行っても、すぐに崩れて倒れてしまいます。

イエス様は、ヨハネによる福音書で「留まりなさい」という言葉をたくさん使われました。それは親しく住むことも意味します。イエス様のうちに、その御言葉に留まるのです。そうすれば、必ず自分のしていることが揺るぎない堅固なものとなります。最後に、ペテロが第一の手紙で書いた、挨拶の言葉を記します。「Ⅰペテ 5:10 あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあって永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみの後で回復させ、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。」